

# 服のチカラで、社会貢献の第一歩を踏み出そう



株式会社ファーストリテイリング  
(ユニクロ・ジーユー)  
サステナビリティ部  
ビジネス・社会課題解決連動チーム リーダー  
岡田 恵治 (おかだ けいじ)

## 貴社の学校向け学習プログラムはどのようなものですか。

ファーストリテイリングでは、2013年から、全国の小学校・中学校・高等学校を対象に、「届けよう、服のチカラプロジェクト」という次世代教育プログラムを実施しています。同プログラムでは、子どもたちが難民支援のために集めた服を、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）を通じて、難民キャンプなどに届ける活動を行っています。



図1 全国のユニクロ・ジーユーの店舗の社員を中心に、400名以上の講師を学校に派遣して、出張授業を行っています。

## 学習プログラムの特長はありますか。

最大の特長は、出張授業後に、子どもたちが社会貢献のために実際に行動を起こせる点です。出張授業では、難民支援に対する理解を深めるために、社員講師による映像や資料を使います。授業後の活動では、ポスターを作成するなど、子どもたち自ら地域に向けた情報発信を行い、難民キャンプに届ける服を集めます。集められた服はUNHCRを通じて難民の方々の元に届くので、子どもたち一人一人

が社会貢献に対する実感を得られるとともに、ほかの社会課題にも目を向け、次の行動を起こすきっかけへつながっていきます。



図2 子どもたちが作業する様子

## プロジェクトが生まれた背景を教えてください。

2006年からUNHCRとともに難民支援の活動に取り組んできましたが、活動を続ける中で、自分たちのビジネスである「服」を生かした支援ができないかと考えようになりました。そこで、お客様が着なくなった服をユニクロやジーユーの店舗で回収し、まだ着られる服を難民キャンプに届ける活動を始めました。服を届ける中で分かってきたのは、子ども服が足りないということでした。難民の40%は子どもであり、店頭で集めた服だけでは十分な支援ができなかったのです。そこから、難民の子どもたちと同じ世代の日本の子どもたちに服を集めもらう活動を通じて、国際理解を深める学校との協働プロジェクトへと発展してきました。

## プロジェクトを続ける中で、どんな変化がありましたか。

10年以上この活動を続ける中で、社会貢献という観点だけでなく、環境配慮の観点での活動の重要性が高まっています。服は環境負荷が高いと言われている商品です。服の原料には、綿や羊毛、石油などの資源が多く使われて

いますし、工場で服を作り、輸送する際にもエネルギーを使います。一方で、破れたり、飽きたり、サイズが合わなくなったりした服は着られなくなり、捨てられてしまいます。環境に負荷をかけて作られた服が、簡単に捨てられることで、また環境に負荷をかけてしまうのです。我々は服を作る者の責任として、服の寿命を延ばし、役割を拡大していくためのさまざまな活動に取り組んでいます。学校への出張授業はその一環で、「服を捨てる前に自分たちでできることがないかを考えもらいたい」という想いから活動しています。

図3 同社の取り組みは、東京書籍が運営するSDGs学習サイト「EduTown SDGs」でも紹介しています。

## 全国の先生方や子どもたちに向けて、メッセージをお願いします。

我々は企業として、また、社会の一員として、皆さんと一緒に社会貢献活動に取り組むことが、社会を変える大きなチカラになると信じています。一人で集められる服には限界がありますが、プロジェクトを通じて服を集めれば、100万枚以上の服を難民キャンプに届けることができます。社会貢献や環境配慮について学んだ後の次の一步として、「届けよう、服のチカラプロジェクト」に、ぜひチャレンジしてみてください！

図4 「届けよう、服のチカラプロジェクト」のお申し込みはコチラから。

せいいつ中学校・高等学校  
化学科教諭  
新屋 知樹 (しんや ともき)

1 コーポレート型探究学習の意義

本校の探究学習は、学年全体で授業の一環として行われるプログラムと、希望者が主体となって取り組む課外活動として行われるプログラムに分けられます。ファーストリテイリング社と協働した本活動は、希望者対象のプログラムとして実施しました。実際に基幹産業として社会を動かす企業と学校が連携し、ふだんの授業では味わうことができない資本主義社会における企業の在り方、リアルを学ぶ活動は、生徒の将来を考える際の大きな指針になると考えています。

2 生徒の「やってみたい」から始まった本活動

本プログラムへの参加は、ファッショニンに興味のある高校3年生の生徒の提案からスタートしました。本校では生徒の自主性を尊重しており、生徒がプログラムを発案し、学校全体を巻き込んで実現するケースは少なくありません。今回は中学1年生から高校3年生まで40名程度の有志生徒が集まり、活動がスタートしました。ファッショニンに興味のある生徒から、ユネスコスクールとして世界の難民問題に関心を抱く生徒、さらには将来への漠然とした不安から「とりあえず話を聞いてみよう」と一步踏み出した生徒まで、その参加理由はさまざまでした。教員としても、このような課外活動には大きな意義を感じました。

3 世界とのつながりを実感した回収活動

約2週間にわたる子ども服の回収活動では、ダンボール15箱分もの衣類が集まりました。生徒はこの活動を通して、少しでも難民の人たちの助けになりたいという気持ちが高まっただけでなく、子ども服という身近なアイテムがもつ可能性や、自分たちの生活レベルが世界の反対側とどのようにつながっているかを実感してくれたようです。こうした小さな活動が、生徒たちの将来の選択や社会への意識を少しづつ後押ししていることを願いつつ、今後も探究学習の機会や活動を幅広く提供し続けたいと考えています。

図5 集めた服を生徒が箱詰めする様子

22 特集 ◆ 外部連携による社会に開かれた教育の実現

教室の窓 vol.77

23